

詩 心の宝物

karinomaki

すみれ

私のこと 弱いと思うの？
だから守ってくれようとしたのですか？
私を摘んではちに植えようとしたあなたは
私のつゆを見て
私に手をふれずに去っていった
これっきり会えなくても、
あなたの目にただ一度とどまれば、
私は生きていける。
そんな 私の強さを知ってほしかった。
でも、たくさん日が照った日の夕暮れ、あなたはまた現れて
お水をくれた。
私は雨が降ると、そのお水の味を思い出す
晴れ上がった日、
私は花をもう一輪咲かせた
あなたに見てほしくて。

かきつばた

私は知らなかった
泥の中から 花を咲かせる方法を
子供の頃
雨があがって
白くすきとおる空気の中に
美しいかきつばたが咲いていて きれいだと ただ思っていたけれど
この花の本当の意味に気がつくまで
どれくらい月日がたったのだろう・・・
よどんだ泥が
この花の美しさをつくっていたなんて・・・
本当の美しさは
泥から、土からつくられるのだ
人も同じで、
自分の心の醜さを知って 自分をかえりみて、初めて美しくなれる
神は、花をとおして伝えているのだ
心の中で泥を浄化できる人が本当に美しいのだと・・・。
雨が降って、私は天を仰いだ
この雨はかきつばたへの そして戦う私達への祝福だと思った
決して雨に色あせない、つらさにへこたれない意志を持っているから
この雨は心に美しく降るのだと。
心の美で咲くかきつばたに

美しく澄んだ雨が降る

青空

青空を見上げながら
君への愛を抱いていたら
逆に 青空に抱かれていた
君は私の青空
すけるようにきれいなのに
濃く深く自分を持っている
君が素敵なのは
君の大切な「青」のせいだね
きっと果てしない夢を その色に秘めている。

君だけの輝く個性の中に
たくさんの光を宿して
君は天上で 地上の僕を照らす

自然

私は 大切なものを子供の頃から いつのまにか失っている気がしていた
しかし その喪失感こそが
大きな人生の宝を呼び込むための鍵穴だった
失ったものをとりもどそうとするとき、
最も大きな人生の宝をつくれる
そして 思うのだ
私は本当は 何も失うことなどないのだ

この自然を 美しいと思う心があるかぎり・・・。

ホワイトクリスマス

太陽は涙を流すとき
雲にかくれる
寒くなると その涙は
白く輝いて舞い降りる
ホワイトクリスマス
太陽のひそかな贈り物は
クリスマスケーキの色をした きれいな結晶
雲の切れ間から こっそり届けられる
ひとりぼっちの太陽の

悲しくて きれいな涙

木

疲れた目を休めるために
自然の中をさまよっていたときに
私が見ていたのは
あなたの緑
何も持たなくても幸せだよと
あなたは教えてくれた
あなたは 葉を失っても 冬をのりこえていく
少しさびしげなあなたを
美しく 雪がかざる

心の春

あなたは寒空の下で
かじかんで あわせた 私の両手を
包み込んだ
神に守られているようだった・・・
しずかに目を閉じると
冷たい空気をもっと冷たく感じて
この世のけがれが消えていく・・・
冷たいのに、心が温かい
寒さが育ててくれる
心の春

レースのカーテン

あなたは今
カサの下ですか？
屋根の下ですか？
私は カーテンの下なのです
部屋にいたら、何もない窓に
レースのカーテンが降ってきたのです
空は 部屋でへこんでいた私に
銀色のカーテンをくれたのです
どこにいても、この天からの白い贈り物が
あなたのことも、誰のことも
元気づけて、
心を真っ白にかえしてくれますように・・・

丘

「待っていてね。あなたに近づくから」
そう言って君は小さな丘を毎日のぼる
私が死ぬとき、「空にのぼるだけで、また会えるさ」と言ったから・・・。
君にとって、丘をのぼる日課は 小さな、だけど大切な支えとなった
丘をのぼるとき、君は強い目をしている
私に会えることを 魂の奥で知っているから・・・。
丘は 私達の秘密の逢瀬の場所だね
強く生きるための
そして また会えるための 私達の大切な宝物

海

めいっぱい飾りのついた服を着せられ、
船の甲板から 幼い少女が何かを叫んでいた
少女は この海を見て、自分が抑えている気持ちを叫びたくなった
まだ着る服さえ自分できめられず、
気にいらぬ飾りをじゃまだと思いながら・・・。
君はもう 心の中に抑えないといけぬ感情を知っている
その気持ちをどうすればいいのか わからないのだ
君が大人になって、その服の飾りのような、
好きじゃないものを自分で切り捨てられたら
いちばん質素な服を着て もういちど海においで。
もうそのとき、君は本当に人生にとって大切なものだけにかこまれているから。

そんな宝物のような日々を、勝ちとったとき、
この海にふく強い風をも
心地いいと感ずることができらるろう

町

昔住んでいた町を車で通った
田舎から初めて引っ越したその町は
私の将来への希望だった
夜になると 広い道が
オレンジ色のきれいな街灯でうめつくされ、
私はその光が あこがれを全て満たしてくれるような気がした
でも、そのとき 私の苦しい青春がもう始まっていた
私は空を見ながら 助けを求めたけれど、
空は白く、雲のなかに沈み込んでしまう気がした
その町をはなれ、私は大人になった
私はあの頃 幼く、
心はよどみ・・・でも、町に対して思う気持ちだけは 純粹だった
大人になった今、あの頃と同じ真っ直ぐな目で見ることができるのなら
つらかった町の思い出を 美しくぬりかえに 帰ろう

バイオリン

ある一人の少女のバイオリンコンサートで

君は泣いていた

君は音楽の道をあきらめないといけなかったから・・・。

でも スポットライトを浴びているのと同じくらい

その涙は美しいよ

君だけのステージに導いてくれる涙なのだから

心が動くということは 何もあきらめていない証

君はこれからどんなにでも 生きていける

君の道は たとえ地味であっても、君だけの七色の虹なんだ

月の光

君はドビュッシーの「月の光」を ピアノで
静かな 消え入りそうな
だけど確かに心に響く音で 弾いていた
僕は 何かを創り出すことの神聖を感じた・・・
君は確かに 鍵盤の上に
淡い月光をつくりだしている
その光は 君だけの色だ

太陽

地平線のかなたに沈もうとしている太陽が

明日会える約束に 夕焼けをえがく

それを見ると、今日一日の苦しみが うそのように消えていった

私のお日さま

私の明日にかける思いを

夕焼けの先に示してくれた